

中野泰志さん

(慶應義塾大学経済学部教授)

世の中の仕組みごとを変えたい！

近ごろ、町のバリアフリーが進み、公共の施設を中心にエレベーターなどの設置も進んでいる印象がありますが……。さて、障害者や高齢者にとって、街は、世の中は、本当に暮らしやすい環境になっているのでしょうか。中野泰志さんに聞きました。

四つのバリア

——バリアフリーユニバーサルデザインなどの研究をなさっていますが、きっかけはあったのでしょうか？
もともと「見る・聞く・触る」といった知覚心理学が専門で、国立特殊教育総合研究所（現・国立特別支援教育総合研究所）で弱視の子供たちの見え方を評価・分析し、そこから具体的にどんな教材や支援が必要なのかを研究していました。実際に障害のある子やその家族から相談を受けていると、解決しなければならぬ

課題が山積みで、彼らへの支援だけでは限定的になってしまう。彼らが暮らしやすく幸せになるためには、世の中そのものが変わらなければと痛感したのです。
二〇〇三年ころ、東京大学先端科学技術研究センターで、バリアフリーについて本格的に取り組むプロジェクトを立ち上げることになり、私も立ち上げメンバーとして参加しました。プロジェクトのコンセプトは、「世の中の仕組みから変えていこう」。私がまさにやりたいと思っていたことでした。私は、携帯電話、エスケーター、ハイブリッド車などの研究に関わったのですが、センターではいろんな分野の人たちがタッグ

を組んでいました。最新の技術を組み合わせることで、さまざまな可能性が生まれつつあるのが現状ですね。

世の中には「物理的なバリア」「制度上のバリア」「情報・文化のバリア」「意識（心）のバリア」があるといわれています。さまざまな技術や発想を組み合わせていくことで、物理的な面でのバリアフリーはかなり進んでいますし、情報にアクセスできないといったバリアを克服できるコンピュータ技術なども出てきま

した。

——障害者や高齢者も街に出やすくなっている？
国土交通省ではユニバーサルデザインの発想で街づくりを進めていますし、地方公共団体も同じ方針に基づいて条例を書き変えている段階なので、全体としてはいい方向に向かっていると思います。

ニッポンは本当に「おもてなし」の国？

——一方、まだまだと思われるところは？
それは山のようにありますよ。たとえば公共の空間がバリアフリーになっても、店舗などには段差があり車いすやベビーカーで入れないところも多い。高齢者向けに作られた電動の三輪車、四輪車（ハンドル型電動車いす）で、鉄道などを利用する場合にも苦勞することが少なくありません。障害には個別性がありますから、柔軟な発想や対応が必要だと思いますね。

たとえばリムジンバス。ノンステップバスではないので、車いすのまま乗車することができません。二〇二〇年には東京でオリンピック・パラリンピックが開催されますが、日本は「おもてなしの国だ」と宣言し



●なかの やすし 一九六一年山口県生まれ。慶應義塾大学大学院社会学研究科修士課程修了。国立特殊教育総合研究所 慶應義塾大学経済学部助教授、東京大学先端科学技術研究センターバリアフリープロジェクト特任教授を経て現職。専門は、実験心理学、障害児（者）心理学、ヒューマンインタフェース。